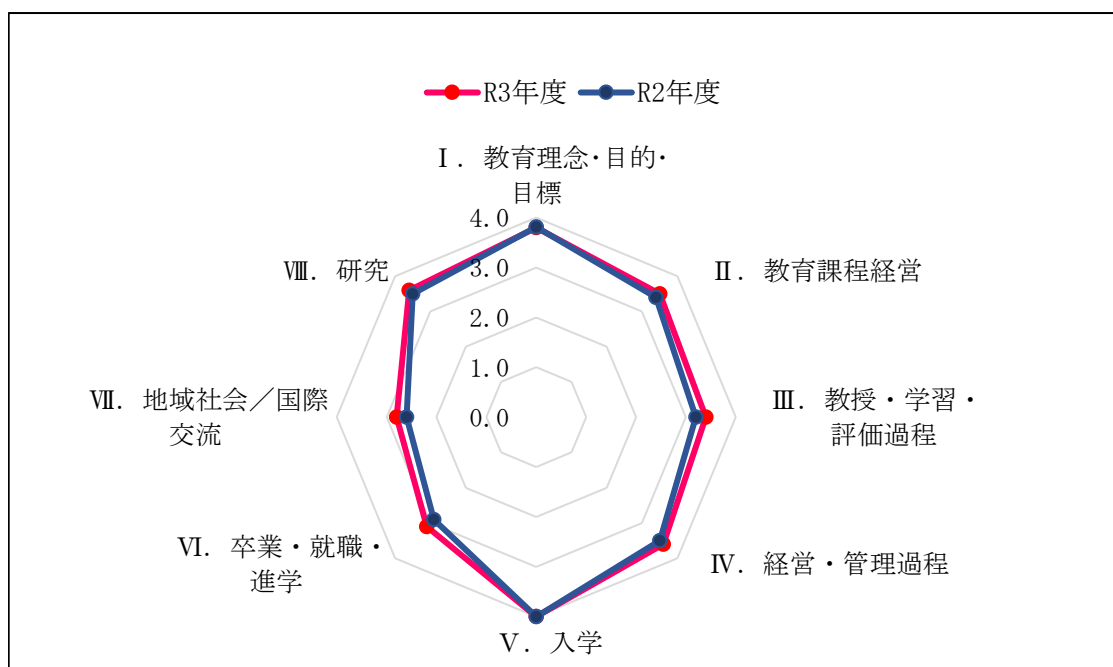


令和3年度 自己点検・自己評価結果

評価内容（領域）	R3年度	R2年度
I. 教育理念・教育目的・教育目標	3.8	3.8
II. 教育課程経営	3.5	3.4
III. 教授・学習・評価過程	3.4	3.2
IV. 経営・管理過程	3.6	3.5
V. 入学	4.0	4.0
VI. 卒業・就職・進学	3.1	2.9
VII. 地域社会／国際交流	2.8	2.6
VIII. 研究	3.6	3.5

【評価基準】 4：当てはまる 3：ほぼ当てはまる 2：やや当てはまる 1：当てはまらない



I. 教育理念・教育目的・教育目標

【自己評価】

●教育理念の基本精神「智慧」「創造」「誠実」は、教員の指導場面や発言内容から学生にとってわかりやすく学生の学習活動や教職員の教育活動を導くものになっている。

●社会のニーズに対応し、教育目的を果たすために教育目標を見直し、教育課程構築の考え方を検討し編成した。教育目的・教育目標の評価に対する考え方を反映させ履修規程も見直している。

【今後の課題】

●教育理念が学習活動や教育活動を導くものとなっているかは引き続き評価していく。

●改正カリキュラム運用に向けて、パフォーマンス評価も含め、評価の考え方を再検討する。

●新旧カリキュラムが並行運営となるため、履修規程等の変更点を学生が理解できるよう、十分に説明し理解を促す。

II. 教育課程経営

【自己評価】

- 学校運営については、教員会議、学校運営会議で情報を共有しながら検討できている。
- カリキュラム改正に伴い、教育理念を反映した教育課程編成の根拠、教育目標と教育内容の関連、教育内容に対する考え方の根拠、教育課程全般の構築における教育内容の位置づけ、単元の根拠について明文化し、教育計画を立て申請し承認を得ることができた。
- コロナ禍での ICT を活用した教育を行うためのサポートは十分得られており、教員は積極的に講義や実習指導に取り入れ、実践報告につなげる研究活動計画を立てている。
- コロナ禍で臨地実習が困難となった場合の学内での実践活動外学習が目標達成につながるよう、各担当教員が教材や課題を提示し、教育している。看護実践を学ぶために様々な工夫とどのように評価するのか教員会議や実習指導者会議で検討している。臨床の協力を得てオンラインで実際に患者と対話し直接的関わりが学べるよう指導者と調整した。可能な範囲で臨床と連携しながら極力臨場感が伝わるよう工夫し進めていきたい。

【今後の課題】

- 令和4～5年度は、新カリキュラムと旧カリキュラムが並行するため、学生にわかりやすいように学生便覧、シラバス、実習要項の編集を工夫していく。また、教育課程の考え方を反映した各授業科目が運営できるように、教育方法や教育評価の概要を可視化し指導案へとつなげていく。

III. 教授・学習・評価過程

【自己評価】

- オンライン授業が増え、学生の反応の確認方法やグループワークなど IT 推進室と連携し、授業も改善工夫できるようになっている。
- 看護技術教育に関しては、密を避けるために演習時期や人数調整が必要で、技術試験を技術チェックへ変更するなど臨機応変に変更した。
- 実習指導では、オンラインと学内演習を組み合わせているが、学生個々の学習状況に応じ対面指導が必要な場合は、感染状況を見ながら行った。特に学習に向かえない学生に対しては、自身を律し目標達成できるように支援した。
- 教科外活動もコロナ禍で「できない」から、「どう工夫すればできるのか」へと意識が変化し、オンライン学生祭等新たな企画運営ができてきた。
- 教授・学習・評価過程全般について、人事異動に伴う新たな視点やカリキュラム改正にて見直したことで、課題が明らかとなり改善へとつなげることができた。

【今後の課題】

- オンライン授業における学生の反応を確認する工夫や学生の思考を育む教育方法の工夫を継続する。また、コロナ禍で臨地での実習が難しい場合には、実習施設と連携しながら、事例課題を検討する等、新たな教材開発を行っていく。
- カリキュラム上課題と感じた内容の進度変更や新科目の教育方法、評価、授業科目全体の評価の見直し、実習評価について検討していく。

IV. 経営・管理過程

【自己評価】

●国立病院機構の経営方針を踏まえ、自己評価や学校関係者評価での課題を改善するため運営方針・計画を立て実践している。学校運営にあたっては、地域のニーズを確認し臨機応変に対応していくことが重要と考え取り組んだ。病院方針の“ピンチをチャンスに変える”を実行すべく、学生確保につながるようオンラインに進路相談会や学生祭等を企画するなど、新たなことへのチャレンジが昨年度よりは増えた。

●自己点検自己評価は、学校運営方針取り組みの評価と連動させながら実施し、ホームページで公表している。また、自身の1年間の教育活動の振り返りの1指標として、看護教員の倫理的行動アンケートを全員が実施した。

【今後の課題】

●国立病院機構附属養成所としての使命を果たせるよう、コロナ禍でもできる方法を検討し教員・学生共にチャレンジし続ける。

●自己点検自己評価表の見直しと教員個々が明確なデータに基づく評価を行う評価力を更に身に着ける。

V. 入学

【自己評価】

●募集活動として香川県・徳島県・愛媛県の高等学校の進学状況、過去の受験状況の推移を考慮して高等学校を絞り込み、高校訪問を夏季休暇中に実施した。今年は、県内限定の縮小オープンカレッジとしたため、近隣県で希望があった高校一校に対し高校内進路説明会を実施した。

●年2回計画していたオープンカレッジはコロナ第5波の影響を受け、8月分が開催できなかったため、オンラインに座談会を企画し2回実施した。また、新企画オンライン学生祭で、在校生とのオンライン座談会を設け、チャットによる参加者との交流を図った。アンケートでは、本校への興味関心が高まったとの声も聞かれ、参加者の中から入試への応募者があり成果につながった。

【今後の課題】

●募集活動として、高校訪問継続、近隣高校内での学校説明会、進路相談会への出席、オープンカレッジを継続する。コロナの感染状況に合わせ、高校教諭を対象とした学校説明会を再開、また、オンライン募集活動(進路相談座談会や学生祭)を継続する。

●入学試験応募状況を分析し、特別推薦など入学者選抜方法等の検討を行う。

VI. 卒業・就職・進学

【自己評価】

●看護師国家試験に対しては、3年間の国家試験対策計画に基づき教育しており、Moodleを用いた模擬試験を実施し、学生が自己学習に活用している。3年生は学習状況に応じ、主体的に活用できる学生が増えてきた。また、低学年用模擬試験問題を追加し、1年生は看護技術試験と関連する解剖生理学や病理学の問題を解いたり、2年生は夏季休暇前後に実習と連動させて基本となる知識の定着をめざし体制を整えることができた。

●学生の就職、進学への支援は、過去の就職、進学結果を活用し学生個々に応じた指導を行っている。

るが、今年度は就職が難しい状況もあり、今後対策を再検討していく必要がある。

●令和3年3月の卒業生は、コロナ禍で臨地実習の実施率が低い状況で卒業したが、就職先施設より卒業教育で困難な状況を確認することはなかった。

【今後の課題】

●3年間の看護師国家試験対策計画を充実させ、Moodleを学生個々が柔軟に積極的に自己学習に活用できることをめざし、学年に応じた効果的な活用時期を検討し習慣化できる体制作りをする。

●卒業生の就職先との情報交換を密にし、コロナ禍で臨地実習が困難になった場合の事例提供や看護実践につながる演習等、教材や教育方法の工夫を協働で行う中で、現場で必要とされる看護実践力を把握し講義や看護技術教育へと反映させていく。

Ⅶ. 地域社会／国際交流

【自己評価】

●オンラインを用いた「進路相談座談会」「学生祭」「クリスマスボランティア」を学生と共に実施し画面越しではあるが、参加者との交流を図りながら、地域に向けた学校としての情報発信を行った。また、依頼のあった献血には多数参加し、地域のニーズに応えられたと考える。

●コロナ禍、今年度も母体病院でのアジア国際小児医療学会（AMCCH）は中止となり、英語での学会の司会や参加者との交流、学会の聴講はできなかったが「英語」や「英会話」の科目学習だけでなく、英会話クラブ活動はオンライン学生祭をとおし、学内学生への情報発信はできた。

【今後の課題】

●今後も感染拡大防止を行いながら、地域交流を図るために何ができるかを考えていく。

●次年度、アジア国際小児医療学会（AMCCH）のオンライン学会開催が可能となり特別講義あれば学生もWEB参加できるように調整していく。

Ⅷ. 研究

【自己評価】

●教員が主体的研究活動に取り組めるよう教員研究会のサポートや研究助成金による経済的サポート体制は整っている。

●研究成果は、主たる研究1名、共同研究3名と昨年度より減少している。

●研究授業への主たる取り組み3名、研究授業へは全員が参加し自己研鑽はできた。

●コロナ禍のため、今年度はオンラインでの学会参加や教員研究会活動となり、学会には参加しやすくなった。聴講の成果を自身の研究活動につなげ

【今後の課題】

●講義や実習指導上の課題について、研究動機はもっているため、早めに研究計画書を立て、計画的に研究に取り組み、成果を発表していく。